

モノとコトをデザインする

——災害公営住宅におけるURのコミュニティ形成支援を通じて

Community Design with Designing Disaster Public Housing

高橋正樹

Masaki Takahashi

宮城・福島震災復興支援本部住宅整備部
住宅建設チーム主幹 / 1972年福岡県生まれ。
九州大学建築学科卒業。同大学院建築
学専攻修士課程修了。東京大学大学院都市
工学専攻修士課程修了。担当地区に「東雲
キャンパスコート CODAN」「流山市立おお
たかの森小・中学校」ほか。

モノとコトのいい関係

独立行政法人都市再生機構(以下、UR)は、市町村からの建設要請に基づき、災害公営住宅を設計・建設をしている。東日本大震災から、5年が経ち、ようやく完成・入居にこぎつけたプロジェクトも多くなってきた。どうつくるかから、どう使いこなしていくかに、ステージが移りつつある。

お住まいの方が、愛着・安心を感じてお住まいいただけるようなモノ(ハード:災害公営住宅)とコト(ソフト:コミュニティ)のデザインを、モノづくりをしながらデザインし、モノとコトとのいい相互関係を構築することが、入居後のスムーズなコミュニ

ティ形成に移行できる理想の形と考える。一方、実際の現場では、以下の事情から、コミュニティ形成支援の形を模索しているのが現状である。

①住まい手の顔が見えない

一部はグループ入居等で顔見知りの人たちが入居する場合もあるが、入居者もさまざまな仮設住宅からくる場合が多い。仮設住宅入居時のコミュニティも一度リセットされ、災害公営住宅入居時からのコミュニティ形成になってしまう。入居者全員が顔合わせをするのも、入居直前、入居後になる場合も多い。

②スピード優先

早くモノをつくるのが優先される。手間がかかるが、顔の見えるワークショップ

等の設計プロセスを経ることはほとんどなく、標準プランの繰り返しによるマスマウジングとなることが多い。

③モノとコトの連携

市町村も、建設部門と管理部門は分かれているため、モノとコトの連携がうまくいっていない場合もある。また、URも市町村から建設要請を受け、モノづくりを担当しているため、コトのデザインまで携わるプロジェクトは多くない。

コミュニティ形成支援事例

いくつかのプロジェクトにおいては、地元・行政・建設業者と共に、コミュニティ形成支援に携われたものがある。以下、URが携わったコミュニティ形成支援の事例を紹介しながら、コミュニティ支援を推進した要素等をまとめた。

塩竈市浦戸諸島: URatoプロジェクト

URは、浦戸諸島で災害公営住宅の建設とともに、魅力的で持続可能な島の復興を目指して「URatoプロジェクト」を推進している。島の方、ボランティアの方とワークショップ・イベント等を開催しながら、モノとコトのデザインを行ってきた。

①ワークショップ形式の設計プロセス

島の生活に合わせた特色ある計画とし、入居後、住まいへの愛着を持って管理に取り組んでいただくため、島の皆さんとワークショップを通じて、災害公営住宅の計画を行った。島独自の生活スタイル

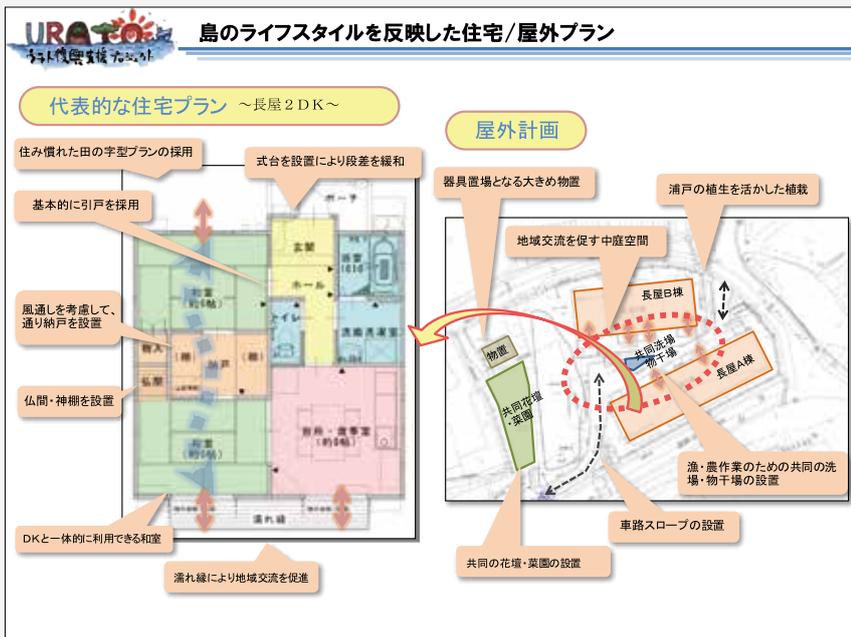


図1 島のライフスタイルを反映した住宅/屋外プラン

や住宅への要望を抽出し、計画(住戸プラン、集会所の設計、屋外計画)に反映した。

②観光資源の復興

K島は、漁業を主要産業としているが、春から秋にかけての島歩きや海水浴といった観光も島の生業の一端を担っている。このため、島の観光資源である海水浴場の再生を目指し、三つの取組みを行った。

1)ビーチクリーンプロジェクト

4月から計3回、島の方たちや山形大学の学生と共に、UR職員がボランティアで清掃を行った。

2) ブイ・プランターワークショップ

島の方たちと不要になったブイでプランターをつくるワークショップを開催。道しるべと一緒に設置して、海水浴場への道を花で飾った。

3) 海の家新規立ち上げ

島の方と山形大学の共同運営で、地元食材を使った食品を提供する海の家がオープン。事業の枠組みづくりや、仮設店舗等の準備等の立ち上げ支援を行った。

塩竈市I地区：地域コミュニティ交流会、N地区：観桜会

これらの地区は、設計・建設段階では、居住者がモノづくりにかかわる機会

はなかった地区である。I地区は、入居後、地域コミュニティ交流会を開催し、地域の方と共に、法面に植樹帯や花壇をつくり、苗を植えた。N地区は、もともと、地元の方々でお花見会が行われていた場所であったため、その記憶を復活させるために、入居時に、桜の植樹祭を行い、お花見を復活させ、場所への愛着を持っていただくきっかけとした。入居後であっても、植栽等を介して、共同作業を行うことで、コミュニティ形成のきっかけになる事例である。

コミュニティ形成を推進する要素

以上の取組みを俯瞰しながら、コミュニティ形成を推進する要素をまとめる。

①住まい手の顔が見える仕組み

ものづくりの段階から、住まい手の顔が見えていく仕組みを取り込んでいくことが、入居後のコミュニティ形成に多大な影響を及ぼす。設計段階から、居住予定者が決まっている場合は、ワークショップ形式も可能だが(浦戸諸島)、そうでなくとも、入居者決定を早め、入居までの顔合わせイベント等をしながら、コミュニティ形成の慣らし運転のような仕組みを

構築するだけでも、コミュニティ形成の核となる団地自治会形成をスムーズにする。入居後も、植樹祭、花壇、菜園づくりといった屋外に居住者がかかわるきっかけがあれば、コミュニティ形成に寄与する(塩竈市I地区・N地区)。

②キーマン、コーディネーター

イベント等を介して、リーダーとなるようなキーマンを見つけることが、コミュニティが独り立ちをしていく大きな推進力となる。

一方で、高齢化が進む中では、リーダーに過度な負担がかかる状況にならないように、NPO法人等が、引き続きコーディネーターとして、コミュニティ形成を支援するのがいいように思われる。さらには、それがコミュニティビジネスとして成り立つように、ハードだけでなく、ソフトにもコストを投じるようになっていくことが望ましい。一部の行政では、そのような業務をNPO法人等に委託する動きがある。

③設計し過ぎない

住まい手が、環境に携わることができるとような空間をわざと残しておくことが、モノへの愛着を醸成する。花壇・菜園といったものは、コストを掛けずに実現できる手段かもしれない(塩竈市I地区・N地区)。



図2 ビーチクリーンプロジェクト



図3 ブイ・プランターワークショップ



図5 塩竈市I地区 地域コミュニティ交流会



図6 塩竈市N地区 観桜会



図4 海の家「かもめん家」

運営を担うのは、地元の方々と山形大学の学生たち。

[図2-6 撮影=独立行政法人都市再生機構宮城・福島震災復興事業本部]